日本中國學會報　第五十七集

『全上古三代秦漢三國六朝文』の編纂について

――清代幕府の學術機能の一端――

水上雅晴

問題設定

『全上古三代秦漢三國六朝文』（以下、『全上古』と略稱）は、上古から隋までに著された文章の總集であり、嚴可均（字は景文、號は鐵橋。一七六二～一八四三）によって編纂された。嚴氏が編纂を發意したきっかけについては、「總序」の中に次のように記されている。

嘉慶十三年、全唐文館を開くも、不才、越えて艸茅に在れば、能く役を爲す無し。慨然として曰く、「唐の文、盛んなるかな。唐已前、要ず當に總集有るべし。斯の事、體大、是れ不才の責なり」。（原文：嘉慶十三年、開全唐文館、不才越在艸茅、無能爲役。慨然曰、「唐之文盛矣哉。唐已前要當有總集。斯事體大、是不才之責也」。）

嘉慶十三年（一八〇八）に『全唐文』の編纂が開始されたが、在野の士に過ぎなかった嚴可均は編纂作業に加わることができなかった。[1] そのことに發憤し、唐以前の文章を自分の手で遺漏なく集めようと決心したのである。「總序」には續いて、「其の秋、始めて之を艸刱し、……力を肆むること九年、艸刱粗ぼ定まる」とあり、九年後には『全上古』の草稿が出來上がったことが示されている。道光十四年（一八三四）に徐松（一七八一～一八四八）に宛てた手紙（『鐵橋漫稿』卷三「荅徐星伯同年書」）に掲げられている著作一覽を見ると、現行本と同じ卷數の『全上古』が著錄されているから、編纂開始から二十五年ほどで完成したと推測される。

『全上古』は七百四十六卷からなり、三千四百九十七人によって書かれた文章が一萬八千篇ほど收錄されている。[2] この編纂狀況を同時期に編纂が始まった敕撰の『全唐文』と比較してみよう。『全唐文』は一千卷からなり、嘉慶十九年（一八一四）に完成した。中には三千四十二人によって書かれた一萬八千四百八十八篇の文章が收錄されている。編纂期間は『全上古』の四分の一にも滿たないが、卷頭の編纂關係者名簿「奉旨開列編校全唐文諸臣職名」には、八十八名もの人員が列擧されている。この中には名を連ねているだけで實質的な編纂作業に從事していない官員も少なくないと思われるが、それでもかなりの人數を動員して、完成させたのである。

期間は四倍程度かかったにせよ、一個人の編纂物が數十名の官員による敕撰書に匹敵する規模に達し得たことには、驚きを禁じ得ない。

『全上古』には、資料の蒐集漏れや典據表示の過誤が見受けられることもあるが、[3]總體的に見ると、梁啓超が寄せている「藝林の淵海」（『中國近三百年學術史』第十三章第五節「輯佚書」）との賞贊に見合う作品であることに異を唱えることはできず、清代輯佚學における一つの精華たる地位が揺らぐことはない。

これだけの仕事が獨力で完成できたかを含め、『全上古』の實際の作者が誰であったかについては、早くから疑案となっている。ただ、廣雅書局刊本を影印した中華書局本『全上古』（一九五八年初版）卷頭所載「出版說明」によると、上海圖書館所藏の百五十二冊からなる嚴可均の自筆原稿には、全面に亘って改訂・補足・削除といった編輯作業の痕跡が殘っており、廣雅書局本はそれを元に校刊したようだから、現行本の完成が嚴氏によること自體は疑いを容れない。[4]

それでも、嚴可均がなぜ『全上古』を完成させることができたかは、依然として不明のままである。嚴氏は、嘉慶五年（一八〇〇）の順天鄉試に合格したものの、「弱冠にして卽ち出游し、足迹、天下に半ばす」（『碑傳集補』卷二十七「嚴可均傳」）と稱されているように、その後、會試に合格することはなく、生涯の大半を幕友として生計を維持した一介の寒士に過ぎなかった。先の「荅徐星伯同年書」所揭の著作一覽には、『全上古』を含め、合計七十三種、千二百五十一卷の書物が竝んでいる。一覽の中で單行の著述として揭げられている『聖賢高士傳』一卷が、實質的な內容は『全三國文』卷五十二、嵇康「聖賢高士傳」（1344。括弧內の算用數字は中華書局本の頁數。以下同じ）と同一だと推測され、[5]同樣の例が他にもあるので、右の數字は多少割り引いて考える必要があるが、嚴氏は嘉慶十三年以後、『全上古』編纂に專念していたわけではなく、幕友として幕主の編纂作業を手傳ったりしながら、他の七十二種の著作をも完成させていたのである。

以上の事實を目の當たりにすると、次のような疑問が生じてくる。『全上古』には大量の文獻が引用されているが、これらの書物はどこにあったのであろうか。『全上古』七百四十六卷を完成させるためには效率よく資料を入手することが不可缺だと考えられるが、嚴氏はどのようにして作業の效率性を確保したのであろうか。游幕生活が長かった嚴氏は、幕府內にあった學術情報を利用したのではなかろうか。もしそうだとすれば、『全上古』編纂に有用な文獻資料や學術情報は、幕府內にどの程度揃っていたのであろうか。

右の疑問に答えるため、『全上古』の內容と嚴可均が滯在した幕府內にあった學術情報との關係について檢討を加えることにする。これまで筆者は、清代の幕府が持っていた學術機能に考察を加えて來て、幕主の學術事業が幕友の働きに依存していた實態を或る程度解明した。[6]今回の考察を通して、幕友が自身の著述活動を展開する上で、幕主が持っていた學術情報をどのように利用したかについてその事情の一端が究明され、それに伴い、清代の幕府が持っていた學術機能の新たな一面が具體的に明らかとなることであろう。

一、幕友の藏書と幕主の藏書

七百四十六卷からなる『全上古』を編纂するには、大量の文獻資料が必要なことは自明である。そこで議論の手始めに、嚴可均が作業を遂行するために十分な藏書を持っていたか、さもなくばどこで必要な文獻を調達したかについて檢討を加えることにする。

（イ）嚴可均の藏書

嚴可均は自身の藏書について、六十歲の頃に書かれたと推測される

「書葛香士林屋藏書圖後」[7]（『鐵橋漫稿』卷八。以下、『鐵橋漫稿』は『漫稿』と略稱）の中で、「今、插架、僅かに二萬許卷にして、不全不備」と述べている。「不全不備」と稱しているものの、二萬卷とは、かなりの藏書規模に見えるが、刊本が一般的になった明末以降、萬卷の書を所有する讀書人は珍しくなくなっており[8]、嚴氏自身の左の發言によれば、數萬卷の藏書などは、或る程度の資力があれば、半年で達成できるものでしかなかった。

幸ひに右文の世、道一風同の會に生まるれば、數囊の金を挾み、書を蘇・杭の市に購へば、半年ならずして、萬卷を累ぬるを致すべし。此れ力有る者の常事、亦何ぞ以て自ら豪とするに足らん。（同右。原文：幸生右文之世、道一風同之會、挾數囊金、購書蘇・杭市、不半年、可致累萬卷。此有力者常事、亦何足以自豪。）

嚴可均の周圍を見ても、同規模の藏書を持っている者は珍しくなかったのだが、藏書の內容は『全上古』の編纂者たるに相應しいものであったと推測される。目錄は殘っていないが、嚴氏はその藏書の全般的な傾向について次のように述べているのである。

余稍や譔述有るも、家貧なれば多く書を聚むる能はず。顧つて周・秦・漢より以て北宋に逮ぶまで、苟くも譔述の必ず需むる所爲るは、亦略ぼ咸之れ有るも、南宋以下は、寥寥焉たり。欲せざるに非ざるなり。力足らざるなり。（同右。原文：余稍有譔述、而家貧不能多聚書。顧自周・秦・漢以逮北宋、苟爲譔述所必需、亦略咸有之、南宋以下、寥寥焉。非不欲也。力不足也。）

南宋以後の資料にまで手を伸ばす餘裕はないが、北宋以前の書物がほぼ揃っていることは、隋以前の文章を收錄している『全上古』を編纂する上での有利な條件と見なし得る。しかし、果たしてそれだけで十分な條件が備わっていると言えるであろうか。そこで、この大著の中で使用されている資料の總數を計算したところ、正確に定めることは難しいが、引用されている文獻の種類は四百を越え、卷數は三萬前後であることが判明した。この三萬卷程度というのは、釋藏六七千卷[9]と道藏五千卷强を合わせた一萬二三千卷を含んだ數字であり、もし釋・道二藏を所藏していたら、それだけで自ら二萬卷と稱する藏書量をほぼ滿たしてしまうので、これらは寺院・道觀で閱覽したと假定して差し引くと[10]、殘りの引用書の總卷數は一萬七八千卷程度になる。すると、嚴可均の藏書で足りているかに見える。

しかし、いくら藏書が南宋以前の作に集中しているとは言っても、嚴氏の所藏資料が漏れなく『全上古』に利用できるとは考え難い。つまり、『全上古』を仕上げるには、一萬七八千卷を數倍した規模の藏書が必要だと推測されるのである。幕友である嚴氏が自分の藏書の全部を游幕先に持參できたはずもないが、今は議論を單純化するため、その點は考慮の範圍に入れていない。

以上の事情を勘案すると、嚴可均が手元にある資料のみを使って現存する規模の『全上古』を完成させることは、參照可能な資料の量が不足していて困難だと判斷される。すると、どこかで必要な書籍を參照したわけで、次に『全上古』の編纂を資料提供の面で支えた可能性がある人物の藏書に注目してみよう。

（ロ）孫星衍の藏書

弱冠以後、遊歷を開始した嚴可均に關しては、三十代半ばに至るまでの事蹟がはっきりしない。陳韻珊・徐德明の兩氏が共同で編纂した年譜によると、乾隆五十九年（一七九四）に上京し、姚文田（一七五八～一八二七）が同年から十年かけて完成させた『說文聲系』十四卷

の編輯に協力していること等が知られるが、姚氏の下に居た期間も不明である。[11]

嚴可均は、『全上古』の編纂を開始した嘉慶十三年（一八〇八）以降、最初の十年間は孫星衍（一七五三～一八一八）の下に居ることが多かったから、『全上古』の草稿はそこで書かれたと思われる。すると、この書物の編纂に有用な資料が孫星衍幕府に備わっていたことが豫想される。果たしてその推測が當たっているか、具體的に檢證するため、幕主たる孫氏の藏書に目を向けてみよう。

孫星衍の藏書は、基本的に『孫氏祠堂書目』（以下、『孫目』と略稱）に著錄されている。藏書の規模を把握するため、『孫目』に著錄されている書物の卷數を加算して行くと、その數は五萬六千に達する。この卷數には、册・函・集の單位で示されている書物は勘定に入っていない。先程、『全上古』を編纂するには引用されている書物の數倍の藏書が必要であるという推測を示したが、孫氏の藏書はその條件を滿たしている。

孫星衍は、『孫目』とは別に藏書中の善本の解題目錄をも作成しており、『平津館鑒藏記』（以下、『平記』と略稱）三卷、『同補遺』一卷、『同續編』一卷、『廉石居藏書記』（以下、『廉記』と略稱）二卷が殘っている。『孫目』に著錄されていない書物がこれらの目錄に著錄されている場合も見受けられるので、孫氏の藏書全體の數が右の數を越えることは確實である。

『孫目』以下の目錄に著錄されている書物と『全上古』で引用されている書物とを比較してみると、引用されている四百種强の書物の中、少なくとも二百五十種、六割以上を孫星衍の藏書目錄の中に確認できた。このように『全上古』所引の書物が孫氏の藏書中に高い割合で確認できるのは、その藏書の傾向によると思われる。孫氏は書物を入手する場合の優先順位について次のように述べているのである。

予始めに書を購ふに、先に秦・三代の古籍を求め、次に漢・魏・六朝・隋・唐に及び、次に宋・元・明の最も精要なる者に及ぶ。

（『孫目』自序）

これは、「周・秦・漢より以て北宋に逮ぶまで、苟くも譔述の必ず需むる所爲るは、亦略ぼ咸之れ有り」という嚴可均の蒐書の基本原則と似通っており、『全上古』の資料の收錄範圍と共通する部分が多い。

以上の事柄から、幕主である孫星衍の藏書は、まず量の面で幕友である嚴氏の藏書より充實していることが確認できた。しかし、『全上古』の中に孫星衍の名を檢出することはできず、その資料を利用したことを直接知る術はない。それでも、引用されている資料を孫氏の藏書と比較することで、その藏書との關わりを或る程度明らかにできると思われる。以下、具體的な事例に卽して檢討を加えてみよう。

二、『全上古』所引資料と孫星衍所藏資料の比較

孫星衍の書目に著錄されている資料が誰もが所有しているような文獻なら、それが『全上古』に引用されていても、孫氏の藏書に對する嚴可均の依存狀況を把握することは困難である。しかし、孫氏はその藏書について、「頗る善本及び祕府未收の本有り」（『平記』自序）と述べており、それらの稀覯資料が『全上古』の中に確認できれば、嚴氏が孫氏の資料を使った可能性は高いと判斷できる。

たとえば、宋の黃伯思撰『東觀餘論』は、『孫目』內編卷四、書畫第十一と『平記』卷二、明版とに著錄されており、後者の中で「流傳絕えて少なく、內府の天祿琳琅も亦之を珍藏す[12]」と說明されている稀

覯書であり、これが『全後漢文』巻七十七、蔡邕「太尉劉寛碑」(891)他において引用されている。また、宋の吳淑撰注『事類賦』は、『孫目』内編巻三、類書第九と『平記』巻一、元版、及び『廉記』巻上、類書とに著錄されており、後者の中で「近ごろ甚だ得難きなり。『天祿琳琅』に、此の書の明版を載す[13]」と説明されているように、内府でも明版しか所藏していないが、これも『全上古三代文』巻二、周武王「硯書」(20)他において引用されている。

右の二書については、他の藏書家の所で閲覧できる可能性は低いので、孫星衍の藏書を利用したと斷定することができる。同様に『全上古』には、所藏者が限られていたと思われる資料が少なからず利用されているので、以下、幾つかの項目に分けて考察を加えてみよう。

（イ）異版資料の利用

『全上古』巻頭に收錄されている「附見存漢魏六朝文集板刻本目錄」は、漢魏六朝期の文集について、嚴可均が校合のために使用した版本を示したリストである。これを見ると、一つの文集に關して複數の版本が列擧されている場合がある。たとえば『蔡邕集』については、以下の五種が提示されている。

一、明初九行仿北宋本。一、明錫山重刻本。一、影寫蘭雪堂活字本。一、明徐子器六卷本。一、陳留六卷本。

嚴可均がこれら全てを所有していた可能性は否定できないが、同じ『蔡邕集』に關する孫星衍の所藏狀況を見ると、その可能性が低いことが分かる。すなわち、『孫目』内編巻四、詞賦第十「蔡中郎文集十卷外傳一卷」には、以下の諸本が列擧されているのである。

一、明九行本。一、明錫山活字本。一、影寫蘭雪堂活字別本。一、明徐子器八卷本。一、陳留六卷本。

これらの中、「明錫山活字本」は『平記』巻二、明版に、「影寫蘭雪堂活字別本」は『同』巻三、舊影寫本に、それぞれ收錄されている。『平記』は、嘉慶十三年（一八〇八）に書かれた自序に、「異時、善本及び得難き本を以て名を大府に彙請して進御せんことを擬す」とあるのによると、「大府」、すなわち總督・巡撫を通して皇帝に獻上することを念頭に置いて作成した善本書目である。そこに著錄されているのと同じ善本を嚴可均が別に所有していたとは考え難く、少なくともこの二種については孫星衍の藏書を利用したと斷定できる。

「附見存漢魏六朝文集板刻本目錄」をさらに見ていくと、『嵇康集』十卷（明黃省曾刻本）と『陶潛集』十卷（宋僧思悅編明仿宋刻本。一、六卷谷圃刻本）とは、全く同じ版本が『孫目』内編巻四、詞賦第十と『平記』巻二、明版とに著錄されている。同様に、「附見存漢魏六朝文集板刻本目錄」の中で嚴可均が提示している版本は、ほとんどが孫星衍の藏書目錄に著錄されており、中には『平記』に著錄されているものも含まれているから、多くの場合、孫氏の藏書が利用されていると考えることは無理な推論ではなかろう。

（ロ）舊版書の利用

『全上古』を通覽すると、宋元版などの舊版の資料が使われていることが分かる。たとえば、『全漢文』巻四十、劉歆「上山海經表」(346)には宋本『山海經』が使われ、『全後漢文』巻八十七、高誘「呂氏春秋序」(945)には『呂氏春秋』元刊本が使われている。嚴可均がこれらの舊版書を幾らか持っていたことは確かだが、多くなかったことは次の發言から讀み取ることができる。

乾隆中、舊版の書、購ひ易し。余、隨ひ得て隨ひ散じ、存する者、僅かに千餘卷。嘉慶中、士大夫、漸次、進呈し、皇上、峻拒せざ

れば、僅かに數年にして、海內翕然として舊版の書を視て奇貨と爲す。余は寒士なり。詎ぞ餘力有りて、此の奇貨を居かんや。

（『漫稿』卷八「書葛香士林屋藏書圖後」。原文：乾隆中、舊版書易購。余隨得隨散、存者僅千餘卷。嘉慶中、士大夫漸次進呈、皇上不峻拒、僅數年、海內翕然視舊版書爲奇貨。余寒士也。詎有餘力居此奇貨哉。）

舊版書は、乾隆年閒には出入りを繰り返して千卷餘りしか所藏できず、嘉慶年閒に古書を獻上する風が盛んになると、とても手が出なくなったということである。この嚴可均の陳述は、前掲の『平記』自序における孫星衍の發言に加え、當時、宋版を中心とする古籍の收藏家として有名だった黃丕烈（一七六三～一八二五）の言葉によって裏打ちされる。すなわち、京師で宋本『輿地廣記』三十八卷を百金で賣ろうとしている人がいることを五柳主人の陶珠琳から知らされた黃氏は、入手するよう賴んでおいた。しばらくして五柳主人が書物の現物を持ってきた時には値段が百二十金に跳ね上がっており、黃氏はその理由について、「京師に宋刻が流行しているからだ（蓋因京師風行宋刻之故）」と識語に記しているのである（『蕘圃藏書題識』卷三「輿地廣記三十八卷（校影宋本）」）。この識語は嘉慶十四年（一八〇九）に書かれており、それは嚴氏が『全上古』の編纂を開始した直後の時期である。

それでは、孫星衍が舊版書をどの程度持っていたかを調べてみよう。孫氏の善本書目である『平記』『同補遺』『同續編』等の中で、宋版に分類されている書物の卷數の合計は八百二十二卷、元版は二千三百五十三卷、舊影寫本は二千七百二十八卷であり、これらを合計すると六千卷近くにまで達する。

『全上古』の中で利用されている舊版書（舊影寫本も含む）にして、かつ孫星衍の書目に著錄されているものは、少なくとも以下の六種が擧げられる（コロンの前の括弧內が『全上古』における初出箇所で、コロンの後が孫星衍の書目における著錄箇所）。

①宋本『荀子』（『全漢文』卷三十七、劉向「孫卿書錄」。333）
：『孫目』內編卷二、諸子第三／『平記』卷一、宋版。

②宋本『列子』（『全漢文』卷三十七、劉向「列子書錄」。334）
：『孫目』內編卷二、諸子第三／『平記』卷一、宋版。

③宋本『說文解字』（『全後漢文』卷四十九、許愼「說文解字敍」。741）
：『孫目』內編卷一、小學第二。

④宋本『釋名』（『全後漢文』卷八十六、劉熙「釋名序」。938）
：『孫目』內編卷一、小學第二／『平記』卷一、宋版。

⑤元本『呂氏春秋』（『全後漢文』卷八十七、高誘「呂氏春秋序」。945）
：『孫目』內編卷二、諸子第三／『平記』卷一、元版。

⑥宋本『鮑照集』（『全齊文』卷二十五、虞炎「鮑照集序」。2929）
：『孫目』內編卷四、詞賦／『平記』卷三、影寫本。

宋元版の類は、異版が幾種類も存在する可能性が低いので、孫星衍所藏の舊版書とは別に、同一の書物の舊版を嚴可均が所藏しているとは考え難い。『全上古』の中で利用されている宋元版は右にとどまらず、『全漢文』卷三十七、劉向「韓非子書錄」（333）と「說苑敍錄」（335）の典據となっている宋本『韓非子』と宋本『說苑』などは、黃丕烈の藏書だと推測されるのであるが[24]、舊版書の利用に際して孫氏の藏書を借覽していることは、否定できない事實である。

（八）外藩本の利用

孫星衍の藏書には、古い資料だけでなく、新發見の資料もあった。新發見資料が一般に流通して知られるようになるまで或る程度の時閒

が掛かるから、これらの資料の利用狀況を調べることで、嚴可均と孫氏の藏書との關係をさらに明らかにできると推測される。ここでは國外からもたらされた外藩本、特に一旦、中土から失われ、その後、日本から逆輸入されて再び流通するようになった二種の書物に着目し、嚴氏がこれらの新發見資料をどのように利用したかを考察することにする。

その一。『文館詞林』一千卷は唐の許敬宗等の奉敕撰で、先秦から唐に至るまでの詩文の總集である。『崇文總目』總集類に『文館詞林彈事』四卷のみが著錄され、『宋史』藝文志八には、總集類に『文館詞林詩』一卷だけが著錄されていることなどから、この書が早くに失われたことが分かる。

中國において『文館詞林』の存在が再び知られるようになったのは、江戸後期の大學頭林述齋（一七六八～一八四一）が寛政十一年（一七九九）から刊行をはじめた『佚存叢書』に、『文館詞林』の卷六百六十二・六百六十四・六百六十八・六百九十五の四卷分が收錄され、それが逆輸入されてからである。その後、伍崇曜（一八一〇～一八六三）が咸豐三年（一八五三）に刊刻した『粤雅堂叢書』の中に、佚存叢書本『文館詞林』が翻刻本の形が收錄されてから、比較的普及するようになった。楊守敬（一八三九～一九一五）等が熱心に採訪した結果、現在では二十五卷程度が集められている。[16]

『前漢文』卷三、武帝「荅淮南王安諫伐越詔」(142) が『文館詞林』卷六百六十二からの引用であるのを始めとして、『全上古』全體では、『文館詞林』から四十條が引かれている。『全三國文』卷五、魏文帝「伐吳詔」(1079) も『文館詞林』卷六百六十二からの引用であるが、この詔が『三國志』に未收錄であるように、『文館詞林』から轉引されている詔敕の二十條以上は、他の文獻に記錄されていないもの、もしくは『藝文類聚』等の類書に節錄の形でしか見えなかったものである。この事實は、『文館詞林』が持つ資料的價値の一端を示している。

『文館詞林』は、佚存叢書本が『平記』卷三、外藩本の項に著錄されているから、孫星衍所藏の稀覯書に含まれていた。『全上古』の中に引用されている四十條がいずれも卷六百六十二、卷六百六十四、卷六百六十八、卷六百九十五の範圍內であることは、嚴可均が見た『文館詞林』が佚存叢書本であることを證明している。『文館詞林』は『粤雅堂叢書』に收錄されているが、嚴氏は叢書刊行の七年前に亡くなっているから、孫氏所藏書を利用したに違いない。

その二。『群書治要』は、唐の魏徵等の奉敕撰で五十卷からなる。中國では南宋以降亡佚した。日本には、『日本國見在書目錄』雜家に五十卷本が著錄されているように早くから將來され、江戸期まで四十七卷分を傳えた。國內における流傳の狀況は、近藤重藏『右文故事』卷五「群書治要」に詳しい。『群書治要』の刊行は、德川家康が最初に企圖し、林羅山らが元和二年（一六一六）の正月から銅活字を用いて製版に着手し、六月に完成した。いわゆる駿河版である。その後、尾張藩で天明七年（一七八七）に開版、寛政三年（一七九一）に修訂された三部が、五年後、中國の年號で言えば嘉慶元年（一七九六）に唐館に與えられたのをきっかけに中國で流通し始めた。この書物が持つ學術的價値については、尾崎康氏が次のように論じている。

……さらに注目すべきは、唐宋以後に失われた書が十餘も收載されていることである。佚書をばやや廣義に解せば、晉書のほかに、子部で尸佼の尸子、申不害の申子、漢の桓譚の桓子新論、崔寔の政要論、仲長統の仲長子昌言、魏の文帝の典論、劉廙の政論別傳、

蒋濟の蒋子萬機論、桓範の政要論、杜恕の體論、吳の陸景の典語、晉の楊偉の時務論、傅玄の傅子、袁淮の袁子正書等である。……嚴可均の全上古三代秦漢三國六朝文（嘉慶二〇年跋）にはこの大半が採錄されるなど、唯一でありかつかなり纏って傳えられた佚文として重視された。[16]

この發言から、嚴可均が佚書を復原する上で特に役立った書物の一つが『群書治要』であることが了解できる。補足すると、嚴氏は『群書治要』の本文のみならず、そこに頭注の形で記されていた校語も利用している。『全上古』所引の文章に対して雙行割注の形で示されているのが嚴可均の校語であり、さらにその中で「舊校」と稱されているのが尾張國校督學細井德民等による校語である。「舊校」とは稱されてはいないが、細井等の校語が既に指摘しているのと同じことが嚴氏の校語に見える場合も少なくないようである。[17]

尾崎氏が列擧している書物の中、嚴可均が輯本を作成したのは、『申子』から『袁子正書』までの中、『時務論』を除いた十二種である。これらの中、崔寔『政論』は『全後漢文』卷四十六に集められており、嚴氏の解題に「今、『羣書治要』より七篇を寫出し、本傳及び『通典』より各おの一篇を寫出す」（722）とあるから、輯佚作業上の主要な來源が『群書治要』であったことが確認できる。『群書治要』は、『孫目』內編卷二、諸子第三、及び『平記』卷三、外藩本に著錄されているから、[18]嚴氏が孫氏所藏の『群書治要』を利用したことは確實である。

崔寔『政論』の解題は嘉慶十九年（一八一四）に書かれており、前掲の年譜によると、嚴可均はこの年以後二年餘り、孫星衍晩年の居所である冶城山館に滯在している。嚴氏が『群書治要』から輯佚した他の書物を調べると、陸景『典語』に對する解題（『全三國文』卷七十。1431）は嘉慶十九年に書かれており、仲長統『昌言』に對する解題（『全後漢文』卷八十八。948）は翌嘉慶二十年に、劉廙『政論』に對する解題（『全三國文』卷三十四。1244）も同じ年に書かれているから、この時期、嚴氏は孫星衍の下で集中的に『群書治要』から材料集めをしていたようである。

本節での考察を通して、嚴可均が『全上古』を編纂をする上で、孫星衍の藏書を利用していたことが確認できた。ただし、嚴氏が利用したのは幕主の藏書だけではなかった。この點について、節を改めて考察を加えることにする。

三、孫星衍の學術活動の影響（一）

孫星衍は乾隆五十二年（一七九七）の會試に合格するまでの七八年間、畢沅（一七三〇～一七九七）の下で過ごし、その幕府內の編纂事業に從事した。法式善（一七五三～一八一三）によると、畢沅が靈巖山館で校刻した書物の中、孫氏と洪亮吉（一七四六～一八〇九）の二人で十六種も擔當しているという（『陶廬雜錄』卷四第三十三條）。このように畢沅幕府內で多數の古籍の校刊に從事した孫氏は、その經驗をもとに自身の幕府內でも盛んに校刊事業を展開した。

『岱南閣叢書』と『平津館叢書』には、孫氏が校訂・輯佚した古籍が多數收錄されており、採錄されている作品の書かれた時代が『全上古』の收錄範圍に重なる作品も多いから、嚴氏がそれを見逃す筈はなかった。孫氏校刊本で『全上古』の中で利用されていると考えられるものを調べてみると、以下の十二種が確認できた。利用されている書物の名と初出箇所を列擧すると左の通りである。

①『燕丹子』：『全上古三代文』卷三、燕太子丹「與傅麴武書」（27）

②『琴操』：『全上古三代文』卷四、介子推從者小傳（30）
③『六韜』：『全上古三代文』卷六、齊太公「六韜」（44）
④『吳子』：『全上古三代文』卷六、齊太公「六韜」（50）
⑤『晏子春秋』：『全上古三代文』卷七、晏嬰「楹書」（57）
⑥『抱朴子』內篇：『全秦文』卷一、安期先生「留書報始皇」（124）
⑦『三輔黃圖』：『全漢文』卷二十六、許裒「明堂議」（269）
⑧『一切經音義』：『全漢文』卷三十八、劉向「別錄」（339）
⑨『漢舊儀』：『全後漢文』卷九十七、闕名「御史大夫遣郡國計吏敕」（996）
⑩『春秋釋例』：『全晉文』卷四十三、杜預「長曆」（1704）
⑪『渚宮舊事』：『全晉文』卷百十九、桓玄「龍山獵詩序」（2145）
⑫『景定建康志』：『全晉文』卷百三十二、史援「後漢史君頌」（2219）

これらについて、孫星衍校刊本を使っていることが明示されているわけではないので、具體的な利用狀況に考察を加えてみよう。たとえば③『六韜』は、通行の六卷本に收錄されている六十篇の文章には含まれていない佚文を集めたものである。それは、『全上古三代文』卷六、齊太公「六韜」に、「案ずるに、今に行なはるる所の『六韜』六卷は、是れ宋の元豐閒の刪定にして、凡そ六十篇。見存するは錄せず、其の佚文を錄す」（44）と說明されている通りである。

『六韜』の佚文を集める作業は、嚴可均が實施する前、孫星衍の依賴を受けた孫同元によって既に實施されており、それは『六韜逸文』一卷にまとめられて『平津館叢書』に收錄されている。『六韜逸文』には嘉慶五年（一八〇〇）に書かれた孫氏の序文が附されているから、『全上古』編纂開始の十年近く前に完成している。その中には八十條程度の佚文が收錄されており、大半が『全上古三代文』卷六において輯佚されている文章と重なっている。

一例を擧げると、『全上古三代文』卷六に「器滿則傾、志滿則覆」（48）という『六韜』の佚文が收錄されており、この文の典據として『禮記』曲禮上疏（「敖不可長、欲不可從、志不可滿、樂不可極」句下）が擧げられているが、『六韜逸文』の劈頭に同じ文章がやはり『禮記』曲禮上疏を典據として揭げられている。このことは、嚴可均が自分で『禮記』曲禮上疏を翻閱して如上の佚文を檢出したのではなく、『六韜逸文』を利用して佚文を採集したことを示していると考えられる。なお、『六韜逸文』と『全上古三代文』卷六所收の輯本とを較べると、引用する文章の長さや句讀が異なる場合、もしくは採錄の有無が相違する場合もあるが、全體として見ればわずかな差に過ぎない。

派生的な事柄に屬するが、孫星衍輯『六韜逸文』に關して一つ注目に値することがある。それは、第五條を始めとして、『群書治要』が頻用されていることである。『群書治要』は孫氏の藏書であったばかりでなく、早い時期から孫氏によって學術的な價値の高さが認識されていたのである。その情報が嚴可均によって共有され、『全上古』の學問的價値を高めるのに役立ったと考えることは、あながち不當ではあるまい。嚴氏が持っていたこの情報が誰しも得られるものでなかったことは、伍崇曜の次の言を見ると分かる。

近ごろ、孫淵如觀察の『平津館叢書』、輯して『六韜逸文』『尸子』の二種有りて、此の書より采摭すること凡そ數十條。而して歷城の馬氏の『玉函山房叢書』、崔寔『政論』・仲長統『昌言』・蔣濟『萬機論』・劉廙『政論』・桓範『政要論』・陸景『典語』・袁準

『正書』に於て、俱に輯本有るも、乃ち轉つて一字も錄せず。則ち馬氏も亦未だ此の書を見ず。（「群書治要跋」。粤雅堂叢書本『群書治要』所收。原文：近孫淵如觀察平津館叢書、輯有六韜逸文・尸子二種、采摭此書、凡數十條。而歷城馬氏玉函山房叢書、於崔寔政論・仲長統昌言・蔣濟萬機論・劉廙政論・桓範政要論・陸景典語・袁準正書、俱有輯本、乃轉一字不錄。則馬氏亦未見此書矣。）

『玉函山房輯佚書』の編者の馬國翰（一七九四～一八五七）は、嚴可均より一世代後の學者である。馬氏は崔寔『政論』や仲長統『昌言』など、嚴氏が輯本を作成した書物について、獨自に輯本を作成しているが、伍崇曜が指摘している通り、『群書治要』を全く利用していない。そのことは、馬氏が『群書治要』の存在やその有用性を知らなかったことを意味している。馬氏は道光十二年（一八三二）の進士であり、會試に合格できぬまま生涯の大半を幕友として過ごした嚴氏より高い社會的地位を獲得したが、良質な學術情報を入手する面では嚴氏に及ばなかったのである。

『六韜逸文』以外の書物の利用狀況を全てに亘って解說する餘裕はないが、二例だけ紹介すると、⑦『三輔黃圖』の文章の中、「聖人之敎……三代脩之也」の五十五字は、畢沅が校刊した六卷本の『三輔黃圖』卷五「明堂」には採られておらず、孫星衍が校刊した一卷本の『三輔黃圖』に確認できる。また、⑨『漢舊儀』の典據表示は、「漢舊儀聚珍板本」となっているが、「御史大夫遣郡國計吏敕」本文百四十字餘りの中、「刑罰務于得中」から末尾に至る五十一字は、「聚珍板本」、すなわち紀昀（一七二四～一八〇五）による輯本たる『漢官舊儀』には見えず、「聚珍板本」をもとに孫星衍が增補した『漢舊儀』にしか見えない。この場合、嚴可均は『漢舊儀』という書名の表示も含めて、武英殿聚珍板本ではなく、孫氏の輯本に從っているのである。

四、孫星衍の學術活動の影響（二）

嚴可均によって利用されていると考えられる孫星衍校刊本は、右に擧げたものにとどまらない。その中で特に利用頻度が高いと推測されるものは、『續古文苑』二十卷である。嘉慶十二年（一八〇七）に書かれた自序によると、唐人の無名氏が編纂した『古文苑』の續編として作成したものであり、編輯段階で幕友の洪頤煊（一七六五～一八三三？）と顧廣圻（一七六六～一八三五）の助力を得ている。

『續古文苑』は、『全上古』と同樣に收錄している作品一つ一つに對して典據を明示しているので、引用書の比較が容易である。資料採集の範圍が周から元の作品にまで及んでいて『全上古』より廣いが、採錄の對象の時期が重なっている作品を較べると、兩書が無關係でないことが分かる。なお、先に紹介した『文館詞林』が『續古文苑』卷五において既に利用されていることは、嚴氏がこの資料の存在と價値を孫星衍幕府において知ったことを示唆している。

『續古文苑』に收錄されている作品で、周から隋までに書かれたものは、三百二十五篇に上る。この數字は、『全上古』に收錄されていない詩を除いた數字である。三百二十五篇の中、『全上古』に收錄されていないのは僅かに三篇である。この事實から、『續古文苑』編纂時に集められた資料を嚴可均が活用していることが分かる。ただし嚴氏は、集められた文章を利用するだけでなく、洪頤煊や顧廣圻が實施した校勘の成果も吸收しているようである。後魏の姜質が書いた「亭山賦」を例に說明してみよう。

『續古文苑』卷二に收錄されているこの賦に對しては、典據として『洛陽伽藍記』が目次にて示されている。文中の「夫偏重者、愛昔先民之由朴由純」句に對しては、「案ずるに『之』の下、舊、『重』字を衍するも、今刪る」との校語が割注の形で示されている。通行本『洛陽伽藍記』卷二には、校語の指摘通り「之」字の下に「重」字がある。「亭山賦」は『全後魏文』卷五十四（3785）に收錄されており、問題の句については、特に理由を示すことなく『續古文苑』の校勘に從って改めている。同樣に、續く「與造化而梁津」における「梁津」二字について、『續古文苑』では、「案ずるに二字、舊、倒するも、今正す」と注記し、恐らく押韻を根據として、『洛陽伽藍記』本文の「津梁」を「梁津」の誤倒だとして語順を改めているが、『全後魏文』でも特に斷ることなく本文を「梁津」に改めている。なお、『續古文苑』所收「亭山賦」末尾の校語には、「舊鈔本洛陽伽藍記」を用いて校訂した旨が說かれている。『全後魏文』所收「亭山賦」に典據として示されている「舊寫本洛陽伽藍記」はそれと同じものであろう。

ところで、『續古文苑』の編纂に從事した顧廣圻は、生涯において校刊に關與した書物が百六十七種に達している事實[19]が示す通り、當代隨一の校勘學者であった。顧氏はまた、先の①～⑫までの孫星衍が校刊した書物の中、④『吳子』、⑥『抱朴子』內篇、⑨『漢舊儀』の編纂に協力している。嚴可均は、これらの書物を利用することで、孫星衍幕府に居た他の幕友の力も間接的に借りることができたのである。

嚴可均は『續古文苑』を利用する一方で、時にはその誤りを訂正することもあった。たとえば、後魏の高允が書いた「塞上公亭詩序」について、『續古文苑』卷十一では『太平御覽』卷百五十七に收錄されていることになっているが、實際は卷百九十四に收錄されている。『全後魏文』卷二十八（3653）でも、典據を「御覽百九十四」としているから、嚴氏は『續古文苑』を機械的に轉記したのではなく、自身で原典に當たって確認していることが分かる。

別の事例を擧げると、『續古文苑』卷七に收錄されている「晉寡婦淑與兄弟書」と題する手紙を孫星衍は晉に書かれたものとしているが、嚴可均は『全後漢文』卷九十六、徐淑「爲誓書與兄弟」（991）において、この手紙が漢の秦嘉の妻徐淑によって書かれたことを論じている。改嫁させようとする兄弟たちに對して拒絕の意志を示したこの寡婦の誓書について、嚴氏は『漫稿』卷七「後漢秦嘉妻徐淑傳」においても取り上げており、徐淑の詳細な傳記を書いて自說の正當性の證明を試みている。「後漢秦嘉妻徐淑傳」は、書出しが「孫淵翁、『續古文苑』を爲り、寡婦淑の誓書一首有るも、時代を得ず、晉の文に列入す」となっていることから分かるように、『續古文苑』の過誤を正さんがために書かれたものである。

嚴可均は右のように『續古文苑』の補正を行なうばかりでなく、孫星衍が提示している資料の異文の檢出をも行なっている。たとえば三國吳の王蕃による「渾天象說」は、『續古文苑』卷九においては『開元占經』を典據として收錄されているだけだが、『全三國文』卷七十二（1441）においては、同じ文章が斷片的なものも含め、『晉書』天文志、『宋書』天文志、『隋書』天文志、『北堂書鈔』卷百三十、『太平御覽』卷二にも見えることが示されている。このように典據表示が充實していることは、『全上古』の特徵の一つで、現在もその有用性が失われていない理由の一端もここにある。

孫星衍が校刻した書物の中には、嚴可均が協力しているものもあり、單行の著作としては、『說文解字宋本』『魏三體石經遺字考』『北堂書

鈔』『孔子集語』等が擧げられる。これらの編纂も『全上古』に影響しているようである。右の中、『北堂書鈔』は當時未刊ながら、孫氏がその價値を再發見して同時代の學者がこの百六十卷からなる類書を重視するきっかけを作った、と鈴木啓造氏によって評されているから、[20]『全上古三代文』卷一、夏禹「開望」(12)を始めとして五百を越える箇所で利用されているのも、孫星衍幕府における學術活動の直接的な影響に他ならない。なお、嚴氏と『北堂書鈔』との關わりについては、『漫稿』卷八「書陳禹謨刻本北堂書鈔後」、「書北堂書鈔原本後」、「書汪小米所藏北堂書鈔原本後」の諸篇に詳述されている。

完成した作品では、『孔子集語』十七卷がとりわけ注目に値する。この書物は、孔子が語った言葉や孔子について言及されている記述を様々な文獻から拾い集めて分類したものである。資料の蒐集範圍は廣く、調べてみたところ百種前後の文獻資料が使われている。嚴可均が書いた「孫氏孔子集語敘」によると、孫星衍が嘉慶十六年(一八一一)に着手して翌年に初稿が成り、さらに二年經った嘉慶十九年(一八一四)から嚴氏が編輯作業に加わって、體裁の整理、增補・改訂などを行なっている。

この『孔子集語』は引用資料に對して逐一、典據を明示しているから、資料の利用狀況に關して『全上古』との比較が容易である。そこで、『孔子集語』の中で使われている資料の『全上古』における利用狀況を調べてみると、約百種類の書物の中、九割が『全上古』に使われている。『孔子集語』の編纂が開始された時、嚴可均は既に『全上古』の編纂に着手していたから、この二書は同時に資料の採集が行なわれており、嚴氏は『孔子集語』の編纂を手傳いながら、『全上古』にも利用できる資料を發掘できたわけである。

前節で取り上げた『六韜佚文』、本節で論及した『續古文苑』『孔子集語』等のように、孫星衍が校刊した書物には、『全上古』に轉用可能な文章が大量に含まれていた。孫星衍幕府にあったこれらの學術情報は、嚴可均の效率的な資料採集を可能にしたのである。

結論

嚴可均『全上古三代秦漢三國六朝文』の編纂狀況に檢討を加えた結果、孫星衍の幕友であった嚴氏が編纂に當たって幕府內の學術情報を最大限に活用したことが分かった。孫星衍幕府が持っていた學術情報は、質量ともに充實した幕主の藏書から直接得られるだけでなく、幕主が校刊した書物にも蓄積されており、就中、後者からは自身を含む幕友が輯佚・校勘した成果をも取り込むことができ、嚴氏はそれを利用することで『全上古』編纂の作業效率を高めることができたことも分かった。嚴氏がこの大作の編纂を決意し、完成にまでこぎ着けることができた大きな理由は、孫星衍幕府內に好適な環境が整っていたことに求められるであろう。

本稿の考察を通して、幕府は、幕友の學術活動の成果を幕主が金で買い取るような言わば一方的な知的搾取の場だったのではなく、幕友にとっても必要な研究環境を得られる場になり得たことが明らかとなった。

『學人游幕與淸代學術』(社會科學文獻出版社、一九九九年)を著し、淸代の幕府と學術の關係について詳細な論考を發表した尙小明氏は、幕府を構えた幕主は總じて藏書量が多く、そのことが好學な幕友に對する吸引力になったことを說いている(同書二百五〜六頁)。しかし、尙氏が紹介しているのは、孫星衍が畢沅幕府で幕主の藏書を使って學

識を深めることができたことを述べた、「畢督部の藏書、海內に甲たり。資りて予に給し、其の學を竟ふるを得しむ」（『五松園文稿』卷一「孫忠愍侯祠堂藏書記」）のように表面的な事例に過ぎず、幕友による幕主の藏書の利用實態については考察が及んでいない嫌いがある。孫氏のように詳細な藏書目錄が殘っている幕主は稀であり、本稿で紹介した事例は、尙氏の所說に對して實證的な裏附けを與えた、という意義も認めることができる。

本稿では、紙數の制限から、孫星衍所藏の金石資料や孫氏の交友關係を論じる餘裕が無かった。管見によると、この二つの要素も嚴可均が『全上古』編纂する上での有利な條件を提供している。これらを含む未解決の問題については、別の機會に論じる豫定である。

注

(1) 嚴可均の念頭にあったのは、擧人でありながら四庫全書纂修官に任じられて多數の書物の校訂に從事し、その後、特に殿試受驗を許され、翰林院庶吉士の肩書を得た戴震（一七二三～一七七七）であろう。嚴氏は、嘉慶五年（一八〇〇）鄕試合格の際の同年である徐松が總纂官だったから、その引き立てを受けることを期待したのであろうが、希望通りにはならなかったのである。

(2) 「總序」では三千四百九十七人となっているが、徐德明氏によると實際の收錄人數は、三千五百十九人とのことである。同氏「『全上古三代秦漢三國六朝文』收錄作者知多少」（『華東師範大學學報』一九八六年第九期）を參照。收錄文章の數については、『篇名目錄及作者索引』に從って計算したら一萬七千九十五篇になったが、採錄漏れがあるようなので正確な數字ではない。

(3) 『全上古』編纂上における不備の一端については、中嶋隆藏「嚴可均輯佚學的成績」（國立中山大學淸代學術研究中心編『淸代學術論叢』第二輯、文津出版社有限公司、二〇〇一年）を參照。

(4) 『全上古』の作者の問題をめぐる議論の變遷については、徐德明「『全上古三代秦漢三國六朝文』作者考」（『華東師範大學學報』一九九〇年第一期）を參照。

(5) 唐鴻學が嚴可均輯本をもとに『聖賢高士傳贊』一卷を編纂しているが、採錄されている文章と提示されている典據等は、『全三國文』卷五十二所收「聖賢高士傳」とほぼ同一である。唐氏が入手したと稱している輯本が『全三國文』所收の輯本である可能性もあるが、第三者が嚴氏の輯本を利用して編纂し直しても、『全三國文』所收「聖賢高士傳」より充實した輯本を作成できなかった事實から、嚴氏が單行の著作として示している『聖賢高士傳』一卷が實質的に『全三國文』所收の輯本と變わらぬことが推測される。

(6) 具體的には、以下の拙稿三點において論じられている。「淸代の幕府と學術交流—許愼の官銜をめぐる議論を中心として—」（『北海道大學大學院文學研究科紀要』第百七號、二〇〇二年）、「段玉裁と十三經注疏校勘記」（『中國哲學』第三十一號、北海道中國哲學會、二〇〇三年）、「阮元と『十三經注疏校勘記』—『儀禮』の校勘を中心に—」（『中國哲學』第三十二號、北海道中國哲學會、二〇〇四年）。

(7) 本文中の「四十年來、南游嶺海、北出塞垣」という記述と、前揭の「弱冠卽出游、足跡半天下」（『碑傳集補』卷二十七「嚴可均傳」）とを考え併せると、嚴可均は二十歲頃から四十年閒游幕生活を續けた後にこの文章を書いたと推測される。

(8) 井上進『中國出版文化史』第十四章第五節「藏書事情」（名古屋大學出版會、二〇〇二年）を參照。

(9) 『全上古』の中で使われている釋藏の版本は今のところ不明である。釋藏所收書の典據表示は、千字文の順に竝んでいる函號によってなされ

るので、その點に着目して『全上古』所引の釋藏資料を見ていくと、一番大きな函號は、『全晉文』卷百六十五、釋僧肇「注維摩詰經序」(2423)が持つ「務」であり、それは第六百五十二函目に相當する。大藏經の中で「務」の函號を持つもの、つまり六百五十二を越える函號を持つ版本は、明萬曆十七年(一五八九)に刊刻された徑山藏(別稱、嘉興藏。六百七十八函、六千九百五十六卷)や清乾隆三年(一七三八)に完成した龍藏(七百十八函、七千百六十八卷)などに限られる。『全上古』所引資料に附されている函號帖次をもとに釋藏の版本をいくつか調べたが、部分的に一致する版本はあっても、完全に一致するものは檢出し得ていない。

(10) 張紹南『孫淵如先生年譜』乾隆四十五年條に「與方君正澍・顧君敏恆・儲君潤書、讀書金陵城西古瓦官寺。君翻閱釋藏全部」とあり、游幕時代の孫星衍が佛寺にて釋藏を讀んでいるから、乾嘉期にあっても幕友が釋藏を所有することは困難であったと推察される。道藏については、孫星衍「新校正抱朴子內篇序」(『孫淵如外集』卷三)に「江寧道藏在朝天宮、仍借來覆審一過」とあり、幕主となった孫氏でも、『抱朴子』を校刊する際に朝天宮から道藏本を借り出しているから、これまた所藏者は少なかったと推測される。なお、孫星衍の藏書目錄に釋藏と道藏とは著錄されていない。

(11) 姚文田『說文聲系』自序に、「甲寅後、忝竊京秩、僦居京師宣武門外、與友人嚴氏可均往復商確、又益補其所闕」とある。文中の「甲寅」は乾隆五十九年(一七九四)。嚴可均が姚文田の下に身を寄せ始めた時期について、徐德明氏は乾隆六十年(一七九五)說を取り、陳韻珊・徐德明『清嚴可均事蹟著述編年』(藝文印書館、一九九五年)十二頁、注十三を參照。

(12) 天祿琳琅は乾隆帝所藏の善本を集めた藏書室であり、その目錄『天祿琳琅書目』全十卷は乾隆九年(一七四五)にまず完成し、その後、乾隆四十年(一七七五)に重訂された。『天祿琳琅書目』卷九、明版に『東觀餘論』が二種著錄されている。

(13) 『事類賦』は、『天祿琳琅書目』卷九、明版に三種が著錄されている。ただし、嘉慶三年(一七九八)の彭元瑞序がある『天祿琳琅書目後編』全二十卷を見ると、卷五、宋版子部と卷十、元版子部とに一部づつ著錄されている。『孫目』內編卷三、類書第九には『天祿琳琅書目』十卷しか著錄されていないので、孫星衍の手元には『天祿琳琅書目後編』が無かった。したがって、當時の內府に宋元版が所藏されていたことを知らなかったのである。それはともあれ、『事類賦』が稀覯書であったこと自體は變わらない。

(14) ともに『蕘圃藏書題識』卷四に、黃丕烈の所藏書として見える。『漫稿』卷八「書葛香士林屋藏書圖後」に「黃氏丕烈、聚書多宋本、余與久交」とあるように、嚴可均は黃氏との交友が深いから、その所藏に係る宋本を參照したのであろう。

(15) 『文館詞林』の國內外における流傳狀況については、阿部隆一「文館詞林考」(『影弘仁本文館詞林』、古典研究會、一九六九年所收。後に『阿部隆一遺稿集』第三卷、汲古書院、一九八五年に收錄)が詳細である。

(16) 『群書治要(七)』卷末所收「解題」(汲古書院、一九九二年)四百七十三頁。なお、文中に注記されている「嘉慶二〇年跋」が何を指しているかは不明。

(17) たとえば、『全後漢文』卷八十九、仲長統『昌言』下(954)における細井等の校語の利用狀況を說明すると、「何必友年彌世」句について、「舊校云、恐當作久」と述べているのは、細井等の校語を「舊校」と稱して引用したものである。他方で、「不忌初故」句の「忌」字について「當作忘」と述べているのは、細井等の校語に「忌恐當作忘」とあるのを利用したものであるが、これに對しては「舊校云」とは稱していない。

(18) 『文館詞林』と『群書治要』は、『平記』巻三、外藩本において、いずれも「影寫本」として著錄されている。影寫本は刊本や寫本を敷き寫しにしたものであるから、當然、底本となる版本が別に存在する。底本がどこにあったかというと、兩書とも孫星衍とつながりが深い阮元（一七六四～一八四九）の『四庫未收書提要』巻二に著錄されていることから察するに、阮氏所藏本だと推測される。阮氏は、『四庫全書總目』に著錄されていない珍書を入手するたびに提要を附して內府に獻上しており、その提要を集めたのが『四庫未收書提要』であるから、阮氏が日本から渡來したばかりの『群書治要』を入手し、それを孫星衍・嚴可均が利用したのである。

(19) 李慶「顧千里校書考」（『顧千里研究』、上海古籍出版社、一九八九年）による。

(20) 鈴木啓造「北堂書鈔兩抄本考—黃廷鑑手校本と藝海樓本大唐類要—」（『學術研究—地理學・歷史學・社會科學編—』第三十號、早稻田大學教育學部、一九八一年）十四頁を參照。清代における『北堂書鈔』刊刻の狀況については、同氏による「北堂書鈔の刊本および寫本について」（『學術研究—地理學・歷史學・社會科學編—』第二十九號、早稻田大學教育學部、一九八〇年）と「『百衲本北堂書鈔』考」（『學術研究—地理學・歷史學・社會科學編—』第三十三號、早稻田大學教育學部、一九八四年）などを參照。

[附記] 本稿は提出後、複數の匿名の查讀者からのご指摘・ご提案を受けて、部分的に改訂を施した。查讀の任に當たられた各位にはこの場を借りて感謝申し上げる。

本稿の中で利用した『孫淵如外集』等は、京都大學人文科學研究所所藏本である。これらの資料の利用に際しては、京都大學人文科學研究所の武田時昌教授および京都大學大學院文學研究科の宇佐美文理助教授に便宜を圖っていただいた。ここに記して謝意を表する。

なお本稿は、科學研究費基盤研究（c）「清代における幕府と學術の關係について」（課題番號：15520035）による研究成果の一部である。